

国家を超える自由とその倫理

——島田雅彦『悪貨』について——

セリンジャー（朝さろん）

朝さろんの本棚〈53〉…2015年11月12日（木）

テーマ〈現代政治の思想と行動（2）〉

1 現代政治の思想と行動（2）…イデオロギーの政治学

今シーズンとりあげる作品に共通するのは「町」という舞台、つまり「生活のある場所」。このごく身近な（でありながらどこか遠い）ものとして想像できる場所には、当然たくさん人間が暮らしている。読者ひとりひとりの生活と地続きのものとして想像可能な場所を舞台に描かれた物語を、だからこそ実生活（実社会）の「陰画」と受け取ることできるのではないだろうか。

今シーズンのテーマは「現代政治の思想と行動」というものだ。あまりにも耳馴れてしまった「政治」という語だが、政治とは本当は人間のどんな考え（思想）や運動（行動）を指し示すものなのか……。そういう原点を、辞書的な言葉の定義ではなく、生活と身近な舞台で巻き起こる物語を通じて体感的に検討してみたい、というのがこのテーマにこめた狙いの一つである。

一回目の前回は、街に暮らす登場人物たちの複雑な関係性や暴力的な支配／被支配の構図が浮き彫りになっていた。同時に、なにかが本当の善で、どこからが悪なのかという線引きがしにくい言説を内面化したつつ生きる作中人物たちの精神状況に目を凝らしてみた。そ

して政治的な状況下に置かれたメンタリテイがどう思想や行動という形をとって出てくるのかという過程に注目した。

二回目の今回は、人が行動を起こす背景に抱えている「想い」や「理想」というものに焦点をあててみる。政治と繋がったとき、それらは「イデオロギー」と呼ばれることがある。イデオロギーとは「人間の行動を左右する根本的な物の考え方の体系、観念形態、政治思想、社会思想のこと」を指す。このイデオロギーとはいったいどんなものなのか、読書を通じて体験してみたい。そして、イデオロギーを行動に移した時、当事者以外の人間たちにどんな影響がもたらされるのか、その功罪についても考える視点を設けてみようと思う。

2 「彼岸コミュニティ」が体現するイデオロギー

《政府はこの事件を経済テロと位置付け、通貨偽造組織の壊滅を謳いながら、野々宮の逮捕と「彼岸コミュニティ」の摘発によって、「穏便に」事件の解決を図ろうとしていた。貨幣経済を葬ることを夢見た野心家と地道に貧者救済運動を行ってきたグループだけが国家の敵として、葬り去られる》—— 作中で描かれる経済事件に直面した政府が国民に示した事件の幕引きがこれだ。読者はこの箇所を読んでどんな感想を持つだろう。そこにあると思われる僅かな違和感から、考えることをスタートしてみたいと思う。つまり、「野心家」野々

宮冬彦と「地道に貧者救済運動を行ってきた」存在がどのような想いを胸に秘めた人物であったか、ということについて。

まずは後者の方から見てみよう。「地道に貧者救済運動を行ってきた」人物である「彼岸コミュニティ」代表の池尻睦郎。彼は《大学院では恩師の指導で経済史の研究をしていた。(略)机上の空論にも飽き(略)恩師に倣い、畑を耕し、作物を作り、それを流通させるささやかな実践を通じて、経済を考え直してみたいと考えるようになった。実験的に農業共同体を組織した池尻の誘いに応じ、野々宮少年も夏休みには畑仕事を手伝いに来て、学生たちと交流していた》という背景を持ち、《公共の福祉の手が回らない生活困窮者の自立支援を活動の中心に据え、世間の注目を集めた。その頃から彼らは自分たちの組織とその活動を「彼岸コミュニティ」と呼ぶようになり、「仲間」の勧誘に熱心になった。彼らは「仲間」と農作業や森林管理の仕事をともにし、新たな共同体づくりに励んだ》という。池尻の根幹にあるのは《人は放っておけば死ぬ。自殺を止める権利など誰にもない。だが、何らかの抵抗運動を続けている限り、そして、未来に対して責任を負う限り、人は死なないものだ》という、人間の理性が裡に持つ力に対する強い信頼でもある。彼は大学で経済を講じる助教授を務めた過去を持ち、作中で『今ここにあるユートピア』という本を著した人物であり、それゆえコミュニティの理論的指導者でもある。そもそもコミュニティには「市民が互いに誓約し、相互防衛と相互扶助のために団結した、都市の自治的共同体」というような意味がある。では彼が抱えていたイデオロギー（行動を左右する根本的な物の考え方

の体系)はどんなものであったのか、その全体像についてさらに詳細に検討してみよう。

《資本主義の亡者とナショナリズムの信者ばかりのこの国では、真の相互扶助を実践する者だけが倫理的でいられる。国家や資本の彼岸を目指す私たちはそれだけで十分、宗教的だ。人は理論よりも感情で動く。国家がナショナリズムに訴えることで人々の支持を得るなら、私たちは自由と友愛を実践して仲間を増やす。(略)仲間の多様性を確保しなかった。(略)国家に対抗しうるだけの技術や知識の蓄積ができる。内部で利用できるサービスの種類も増えた》という風に「彼岸コミュニティ」を形勢していった彼は、将来についてもこう見据えていた。《コミュニティ内部で生み出される価値が高まれば、それに投資しようという人も現れる。外部の貨幣経済とも関わりを持ちながら、コミュニティ内部の経済規模を大きくすれば、大企業や政府に十分対抗できるようになる。池尻はそれをねらったのだ》。

つまり池尻の中では、貨幣(資本)経済の負の側面を克服するような仕方での「共存」が模索されていたことになる。地域通貨(ローカル・エクスチェンジ・トレーディング・システム(地域交換取引制度)、LETS)の導入も、彼なりの回答の一つだった。投資を期待するということは、当然、外部からの貨幣(資本)の流入を前提としなければ成り立たない。国家は貨幣(資本)経済を維持し、資本のもたらす歪みを国家の内部に同時多発的に存在する多様なコミュニティという運動体が是正していく——そのような共存関係を図っていたのだと考えられる。日本国という国家に帰属する「国民」である

市民たち。しかし同時に、彼ら市民たちが誓約、あるいは確認・共有できるような共通の理念がコミュニティにはある。「彼岸コミュニティ」では池尻によって、市民たちによる国家とコミュニティの両方という多元的な所属(というアイデンティティの確立)が実践されていた。これらが池尻のイデオロギーである。

3 「国家」と「貧者救済活動の担い手」が異なるということ

池尻たち「彼岸コミュニティ」が実行している経済政策は国家の経済観とは大きく異なる。その根本的な違いが「友愛銀行」に象徴されている。《友愛銀行》は、従来の銀行とは全く異なる画期的な原則を打ち出した。金利を取らないことで、債権者と債務者の関係そのものを解消しようとした》と作中で語られるが、この「友愛」と通貨「アガペー」に籠めた池尻の考えを、彼の自著の中からもう少し細かく検証してみたい。

《ひたすら破滅に向かっていく国家や資本制経済を野放しにしておけば、私たちには責任がないのに、共倒れすることになってしまいます。そこで私たちは考えました。新たな信用制度を作り、来るべき未来に備えようと。(略)現通貨からアガペーへの移行は、資本制経済から友愛経済への移行を意味します。原始時代からの人間が持つていた倫理に基づく経済活動を実現するためにこそ、「彼岸コミュニ

「原時代からの人間が持っていた倫理」とはいつたいなにか。おそらくは、衣食住にかかる負担を生活者集団で共に分かち合い協力し合って共存共栄を図る、そんなところだろう。しかしこのような生活を支える集団内の「信頼／信用」関係こそが、池尻がアガペーという地域通貨の名前に託したものの、つまり、真の愛、自己犠牲的・非打算的な愛ということなのだ。これこそが、コミュニケーションを維持し続けるために不可欠な小さな倫理なのだろう。

現に、「彼岸コミュニケーション」に新規に入ろうとした女性に対し、その幹部は「現金の魔力に負けたから、道を踏み外したのでしょ？」アガペーを現金に換えて、外で使おうとすれば、また同じ過ちを繰り返すだけです。せっかくコミュニケーションに参加して、残酷な貨幣経済から逃れることができたのに、また同じ地獄を見ようと思いませんか？」と言葉をかける。これが「彼岸コミュニケーション」が実践する「友愛に基づく新たな経済システム」というイデオロギーである。

物語の中で、大量の偽札によるハイパー・インフレの影響で日本経済が甚大な影響を被る中、貨幣(資本)経済とは距離を置く友愛経済を実践していた「彼岸コミュニケーション」の存在感が相対的に増してくる。それは国家の側から敵視を受けるほど強大なものになる。「彼岸コミュニケーション」自体は偽札とは関係のない地道な活動を継続していたのにも関わらず、である。コミュニケーションの代表代行を務める港幸二は野々宮に語る——「私たちは国家の統制が及ばない自由な土地や自由な貨幣を作ろうとしてきました。そのためには国家に敵対するこ

とがあつてはならなかつた。しかし、偽札を使ったとなれば、あきらかに国家に敵対することになってしまふ。私たちは目下、「彼岸コミュニケーション」を存続させるために必死なんです。貧者救済の事業だけでも継続しなければ、この国は廃墟も同然になつてしまふ。」

ここには内部にいる者の悲痛な叫びが見て取れるが、この悲痛さの中心は、国家に敵視され崩れゆくコミュニケーションが最後に護ろうとしているものが「貧者救済の事業」であることだ。現実社会をモデルとした一種のシミュレーション小説である『悪貨』という作品はもちろぬ虚構の話であり、そこで描かれる破綻に近づいている国家像は現実の国家や政府とは一定の隔たりがあることはだれもが認めるところだろう。だがそれでも、本作において、国家イデオロギーである「貨幣(資本)経済」を否定し、距離を取る形で是正を図った「友愛経済(彼岸コミュニケーション)」の核にあるイデオロギーが「貧者救済の事業」であることを、私たち読者はどう受け止めるべきだろうか。

ここでは貨幣(資本)経済の網目から落ちた落伍者や貧者の救済活動の担い手は「国家」や「政府」ではあり得ないということが、フィクションを介して突きつけられているのだと言えよう。貨幣経済そのものである国家は、貨幣経済が生んだ歪みを修復する力を持たない。だからこそ国家の内部に、「彼岸コミュニケーション」のような貨幣経済と異なるイデオロギーに基づいた運動体、国家を越えようとする共同体の存在が必要不可欠になるのだと池尻は考えたのだろう。同時に池尻は、自身の理想の限界をも見据え、現実的な判断をしていたのではないか。つまり、友愛経済を一国レベルに全体化できずと

も、相応の存在感を持った共同体として国家の内部に留まり続けることを模索した。そのために外部の貨幣(資本)経済とも関わりを持つこと、そのことで国家の延命に手を貸すことにもなること——これが「彼岸コミュニティ」の立ち位置なのである。

野々宮は偽札を「彼岸コミュニティ」への投資に利用したことによって、「彼岸コミュニティ」に危機をもたらし、コミュニティの敵となつてしまった。コミュニティの敵になるとはどんなことを意味するか。

「貨幣経済は矛盾を抱えているから、その矛盾を拡大すれば、自己崩壊するだろう。しかし、友愛経済も君という矛盾を抱え込んでしまった。円だけでなく、アガペーも偽札によって駆逐されてしまうだろう。(略)我々には軍隊も警察もない。一切の暴力を否定してきたからだ。しかし、通貨偽造は暴力以外の何物でもない」と語られる野々宮、彼は貨幣経済(資本主義経済)を続ける国家を全否定していた。そして国家(貨幣経済)から「彼岸コミュニティ」(友愛経済)へ

の価値観の転換を目論んでいた。だが前述した通り、国家と「彼岸コミュニティ」の関係性もまた、対抗関係でありながらも国家なくしては存在できないような矛盾を孕むものであった。ゆえに野々宮が抱えていた国家への怨念は、同時にコミュニティの破壊にも繋がることになってしまったと考えられる。その結果、国家が担えなかった「貧者救済の事業」を担っていたコミュニティであるにも関わらず、野々宮が金の無心に頼った際には呆気なく拒絶されるという結果となった。救済の対象として認めてもらえない、国家からも友愛の輪の中

からも疎外された孤立無援の状態へと野々宮は追いやられることになる。

では、このような孤立的な結末へと追いやられた、本作の主人公とも言える野々宮が抱えていたイデオロギーとはどんなものであったか。それを次項で確認してみよう。言い換えるなら、どのようなイデオロギーがこのような追放をもたらしたのか、という点についてである。

4 イデオロギーが生まれるところ

野々宮は池尻との対話の中でこう語っていた。

——君はこの世界をどうしたいと思っている？
池尻が訊ねると、野々宮は澁みない口調でこういった。
——カネ持ちが偉いなんて間違っている。カネがあれば、人を強
制できる、自由を奪い、奴隷にできる。誰もがカネの力は万能だ
と信じているから、いつまで経っても、貧乏人は貧乏人のままだ
し、金持ちはいっそう金持ちになるんです。
——そんな世界を滅ぼしたいんだろうが、その前に自分が滅び
てしまう。カネが全ての世の中を変えるためにはどうすればい
いと思う？

——カネを持つていても意味がないような社会になればいい。

世界に向けての野々宮の悪態には、単に若く潔癖症な魂が持つ不満だけとは言い切れない部分があるだろう。貨幣の妄信に対する恐れや実体経済を離れた投資経済の負の側面を本作は雄弁に指摘しているからだ。とはいえ野々宮の取った行為——偽札作りとその大量流通——には大いに反省すべき点がある。しかし、通貨偽造と偽造通貨流通という刑事罰を考えることが本作のテーマであるはずがない。私たちが検討しなければならないのは、そのような大きな悪に手を染めてまで野々宮が貨幣経済を一掃しようとした理由がなんであったのかという核心を丁寧に掘り下げることである。その核心がどのような思想的背景を持って形勢されてきたのかという点を踏まえて、次の点を考えてみたい。

《人は若い頃に考えたことを一生引きずるものでね、ぼくも十四歳当時の憤りに未だ縛られていますよ》と野々宮が語る「憤り」とはなにか。作中でも語られるように、愛情溢れる母親と異なり、野々宮の父には問題があった。野々宮がまだ若い時分に父は死去するが、それまでに野々宮が心身に被った影響は決して少なくない。母親の墓参りを実行する反面、父親は無縁仏になっっているらしいことから、野々宮が両親に対して抱いている感情の温度差が甚大なことがわかる。それゆえ彼は《もとも傷つきやすい年頃に母を失うという最悪の事態を経験した者は世界と素直に向き合うことなどできはしない》、《母を貧困に奪われ、父から絶望を受け継いだ息子なんて

将来、ろくな者にはならない》という風に嘯いたり、《父が生きていれば、父を殺しただろう。だが、父は自ら命を絶ったので、それも叶わなかった。復讐の矛先は母と自分に貧困を強いた者たち全てに向かった》と述懐する。

この通り、野々宮の生い立ちには陰影がある。その人生には挫折もある。家庭環境で苦勞したこと、年齢にそぐわない不幸を託ち不満を重ねたことなどは野々宮の人生の見過ごせない一端である。けれどそのような境遇に生まれ出た者が全員、破滅に繋がるようなイデオロギーに身を任せていくわけではないだろう。だとすれば、野々宮のなにが彼をそのような道に進ませたと考えるべきだろうか。

野々宮はこう述懐している。《神仏を信仰したことなどない。人も信用していない。ましてやカネなんて紙屑だと思っている。だが、何かを信用しなければ、何もできない。神々と人、人と人、カネと人をつなぐもの、それが「Credo」だ。「Credit」の語源でもあるこのラテン語は元々、債権や担保を意味するコトバだったが、いつしか信用や信頼や信仰をも意味するようになった。人はコトバや契約や金銭を用いて、信用の証を立てようとした。それでも、信用は裏切られ、最後は何も信じられなくなる》。野々宮はここで、自分は貨幣や国家を信用せず、親や人間も信用せず、自分ひとりで生きてきた、と語っている。そんな中で彼が信じたものは、憎しみや反逆心というべきものだけだったのかもしれない。それを他のなにかと比較したり修整を試みるような契機は、捨て去った信用と共に、彼の胸中には訪れなかった。そういう人生を彼は歩んできたのだろう。

野々宮という人物造型が提示するような、環境に起因する要因が人間性を大きく損ね、かつ回復は難しい、という見方には疑問が残る。幼年時の人格掲載や精神性が決して小さくないだろうことは想像に難くない。だが、青年時の行動を、その心的外傷に類するものの影響と関連付けて説明し終わらせることにはやはり疑問が残る。故に本稿では野々宮の生い立ちがこのような不幸をもたらしたと結論づけるようなことは避け、あくまで作中で指摘された彼の人のなりを確認するに留めたい。一つ言えるのは、人を信用することを避け、人と繋がらなかったからこそ人への免疫がなく、偶然つながった池尻や郭解といった人物たちからの影響を過剰に受けやすい性格になってしまったように思われるということである。いずれにせよ彼の弱さの根幹に、人への／からの信用の欠如の問題があることは間違いないだろう。

5 「信用する」ということ

貨幣経済をめぐる問題、「Credit」の語源としてのラテン語の「Credo」がいつしか信用や信頼や信仰をも意味するようになったという指摘。これらの点を重ねて合わせると、本書のメインテーマである「貨幣経済の功罪」の奥に、人と人の結びつき、信用／信頼をめぐる問いかけが見えてくる。国家（貨幣経済）に対抗する「彼岸コミ

ューン」（友愛経済）という物語の縦糸を先に確認した。この縦糸と絡まる、野々宮とエリカの恋愛、池尻・郭解との交流というような人と人の結びつき、「信用」や「信頼」をめぐる物語こそが本書の横糸になっている。

横糸の、人と人を繋ぐ物語の中で野々宮はこう呟く《誰か、信じなければ、ぼくは救われない》。この台詞からは、彼が隠れ滞在している旅館での住職との印象的なやりとりが思い出される。

——あなたが子どもの頃、両親に深く愛されて育ったのなら、たとえ孤立無援になっても、耐えられるものです。

——愛されていなかったら？

——人一倍頑張るでしょう。でも、脆い。

住職とのこの対話の直後、野々宮は《だが、おまえは孤立無援な状態には耐えられないだろう、と見透かされているようでもあり、気分が悪かった》という感想を抱くが、この感想と同じ指摘を池尻は末期の言葉として残している——《彼は国家からも、組織からも、コミュニティからも追放され、孤立無援になる》。住職と池尻の言葉がまるで予言であったかのように、野々宮はあつという間に転落していく。この転落の過程を「信用」という観点から検証してみよう。

野々宮には問題のある父親がいて、家庭は貧困だった。実の父を父と認めなかった野々宮には、後に二人の父のような存在に出会う。一人が池尻であり、もう一人が郭解である。野々宮はこの二人を

信用しているようにも見えたが最終的にはその信を断ち切る。国家を超えるような強力な政治力と資本の力を手中にしている郭解は貨幣(資本)経済の中でその影響力を行使しているが、野々宮はこれを否定し、池尻のところへと再び戻った。しかしその池尻とは、野々宮の偽札づくりという行為をめぐって決定的に決裂してしまう。《貨幣経済を終わらせるのがイケさんの悲願だったじゃないですか。イケさんは国家の彼岸、貨幣経済の彼岸を作りたかったんですよ。そのためには、貨幣経済の矛盾をとことん拡大してやるしかなかったんですよ》や《理想主義者も晩年には頑迷になる。貨幣経済を終わらせようとした理論家がなぜ、この期に及んで、偽札に拒否反応を示すのか、野々宮には理解できなかった》という箇所はその断絶が見て取れる。

誰も信用できない郭解の組織を忌避する心情は容易に理解ができる。また、《彼らは完全に貨幣経済の側において、もっぱら金融機関の便宜を図り、企業や地方自治体を海外資本に切り売りすることを奨励している張本人たち》、《だが、現実には、より悪辣な売国奴が、詰めの甘い売国奴を罰することで片が付られようとしている》というような政治家(国家)たちの、弱者の下敷きの上に強者が存在するような支配と被支配の論理に与する考え方を拒否する気持ちもわからなくない。なのに、なぜ野々宮は池尻の考え方まで否定しようとしたのか。

池尻には理論家としての顔と、「彼岸コミュニオン」での実践を行うリアリストという二つの顔があったと思われる。両者のあいだで矛

盾が生じたとき、かつては《グローバル資本主義など滅びてしまえ》と考えていたような池尻も思想的に軟化し、現実^{リアリスト}に即した方策を取るように変化したのではないか。まさに現実主義者として。それが貨幣(資本)経済の中に存在する友愛経済という共存であり、国家と共存する「彼岸コミュニオン」という共同体であり、国民でありながら同時にコミュニオンの一員でもある多元的所属という価値観であった。しかしコミュニオン内の現実を離れていた野々宮には池尻のその考えが理解できなかった。野々宮にとって、国家や貨幣経済は一貫して否定の対象であり続けたままだった。偽札を拒否した池尻の考え方を野々宮は《清貧の思想》と非難したが、この箇所にこそ、野々宮自身の問題が透けて見える。

野々宮が指摘した清貧の「清」については抵抗なく理解できるが、「貧」はどうだろう。池尻の考え方や生き方、あるいは「彼岸コミュニオン」に暮らす人びとの生活は本当に、貧しいのだろうか。貨幣経済とは異なる彼らの生き方や暮らしぶりを「貧しい」と判断する野々宮自身こそ、貨幣価値という物差しに囚われているのではないだろうか。現に野々宮は郭解の組織の中で、幼少の時分からは想像もつかないような金に飽かした豪華な暮らしをしているのだ。資本と権力に囲まれた暮らし、つまり郭解のような生き方を長くするうちに野々宮の価値観は貨幣価値に馴らされてしまったのではなかったか。貨幣経済を否定する彼自身こそが、まさに貨幣経済を突き詰めたような生き方をしてきた。この矛盾に気づかず、目の前の現実を破壊

することに盲目的になっていたことが、野々宮の転落を呼び込んだ
本因の原因だろう。この悲しい矛盾のために、野々宮の思想的な背
景は、池尻や郭解に比べ非常に弱いもの、ただの無いものねだりに
見えてしまう。結果として、幼少の頃に自分を苦しめた父親への恨
みを晴らすことだけが彼の原動力になっているように見えてしまう
のだ。野々宮の部下であった鉄幹はそれを見抜いたかのように「あ
なたはただ父殺しをしたかっただけなんじゃないですか？（略）あ
なたは社会を変える前に自分を変えるべきでした」と断罪する。そ
の「父殺し」ですら、郭解を殺せず、池尻も結果的に鉄幹に殺される
という形となり、遂に達成されることはなかった。父も貨幣も殺せ
ず、誰とも信用を結べない取引されない野々宮の存在こそ、彼が
持っていた「0ルピー紙幣」のようなものだった。それは、決して彼
が「これを差し出す方も受け取る方も微笑を浮かべている。この世
のおカネは全てこの0ルピー紙幣を指しているのかもしれない。世
ね」というような幸福なものではない。なぜなら彼が持っていた「0
ルピー紙幣」もまた、偽札だったのだから。

6 自由というアクセラ、倫理というブレーキ

では、どこからも、誰からも遠ざけられてしまった野々宮には、救
われる道はなかったのだろうか。弱者の救済を活動の中心とする「彼

岸コミュニケーション」こそ、その最後の頼みの綱ではなかったのか。最後に
この点を確認しておきたい。

大学で経済学を講じる助教授であった池尻は「カントやマルクス
やブルードン、それに続くゲゼルやポランニーらの学説の問題点を
同門の理論家たちと議論」するような研究生活を送った過去を持つ。
そこから彼が導き出し、「彼岸コミュニケーション」に持ち込んだ思想的中心
こそ、先に引用した「原始時代からの人間が持っていた倫理に基づ
く、経済活動を実現する」ことであり、「真の相互扶助を実践する者だ
けが倫理的でいられる」という認識であった。貧者救済の事業や「友
愛銀行」は、このような理論的背景からもたらされる不可避の帰結
として実行されていた。ではなぜ、生活困窮者となった野々宮は救
われなかったのか。それは「彼岸コミュニケーション」にとって自己否定を意
味するのではないだろうか。

野々宮と同じく、池尻たちコミュニケーションの指導者たちもまた、貨幣
（資本）経済や国家からの自由を模索していた。「私たちは国家の統
制が及ばない自由な土地や自由な貨幣を作ろうとしてきました」
―だが、同時に「そのためには国家に敵対することがあつてはなら
なかつた」という枷を自らはめていた。野々宮がコミュニケーションから救
済の対象とされなかつたのは、直接的には、偽札を作り国家に対抗
したという野々宮自身の罪によるものだ。だが、その本質は、共に自
由を追求した人間同士でありながら、野々宮が、自由と一緒に兼ね
備えるべき倫理というブレーキを持たなかつた点にある。「しかし、
自由を貫くのも命がけでしょう。自由は追放と同じ意味ですからね。

ふと気付くと、まわりには誰もいない。それはつらいものです。と住職に指摘された野々宮の「自由」とは、つまるところ、倫理というバックボーンを持たないただの「無秩序」ではなかったか。池尻の思想の根幹にあった「何らかの抵抗運動を続けている限り、そして、未来に対して責任を負う限り、人は死なないものだ」という人間への信用が、野々宮には欠如していた。信用とは、裏返せば他人への「責任」でもあったのだ。

本書は、社会変革の夢や自治への参加というような「自由」への夢を持つ際に見落とされがちな「倫理」の重要さを指摘する物語でもあるかもしれない。自由と倫理という両輪を上手に回転させていく運動体だけが、「信用」の名に値するのだ、と。

7 世界と直に接すること

電子書籍版の『悪貨』の巻末には、作者によるエッセイが付されている。少々長くなるが引用してみる。

目下、世界は新たな貨幣システム、新たな通貨を必要としている。どのような世界の 到来を望むかによるが、少なくとも二種類の相異なる貨幣が発行されることになるだろう。一つはドルやユーロや円にとって変わる世界経済の決済通貨である。ドルやユ

ーロの暴落は時間の問題で、それに伴い、世界共通通貨の発行が求められるが、それは各国の資源、人口、生産力、技術力、食料自給率その他から割り当てられることになる。資源や食糧自給率の低さなどから、これまでに築いてきた地位から大幅に落ちぶれることは必至だ。FIFAの世界ランキング並みの低い地位に甘んじることになるかもしれない。

もう一つは貧困の解消、生存権保障に必要な貨幣の供給である。こちらはベーシック・インカムと呼ばれたり、分配通貨と呼ばれたりするタイプの貨幣である。金利の付かない地域通貨、米と交換可能なクーポン券のような形ですでに一部で流通しているが、实体经济に即した生活用の貨幣である。投資に使われるドルや円と違って、貧富の差も景気の変動も生まない。

どちらの貨幣を手にするかによって、この先に開けてくる未来は、ずいぶんと変わる。従来の貨幣経済を延命させるか、あるいは貨幣経済の弊害を一掃するか？

(電子書籍版巻末エッセイ「秘密の悪貨ちゃん」より)

作者が本作で試みたのは、物語によるシミュレーション、「あり得るかもしれないもう一つの現実」を虚構として提示することだろう。左翼を「サヨク」と皮肉った小説でデビューし、その後も継続的に国家や政治をモチーフとする小説を継続的に書き継いできた作家にとって、本作のようなテーマは必然的に浮上してきたものと言える。さらに付言するなら、本作は作者が二〇〇〇年頃に参画していた社

会運動の体験の再現という側面があることは否めない。読者はその社会運動への反省を、物語を介して追体験することになる。作者の現実での社会運動は終わったが、だが、小説による社会運動は最新作『虚人の星』（講談社、二〇一五）の内容にも明らかのように、ますます盛んである。もしかすると作者は、社会変革の必要性がより増していると考えているのかもしれない。



【あらすじ】

ある日、ホームレスが大金を拾う。だが、その金は偽札だった。捜査にあたった日笠警部が事件解決のために招喚したが、偽札捜査のスペシャリスト・フクロウ。一方、「美人すぎる刑事」エリカは、国際的金融犯罪を取り締まるため、マネー・ロンダリングの拠点となる宝石商・通称「銭洗い弁天」に潜入捜査をすることになった。そこで捜査線上に浮かび上がってきたのが、グローバルな資本主義を超越する社会を目指す共同体「彼岸コミュニティ」で育ち、今や巨額の資金を操る野々宮という男だった。最後に勝利するのは、金か、理想か、正義か、悪か？ ハイスピードで展開する「愛とお金の物語」

【著者プロフィール】

1961年、東京都生まれ。東京外国語大学ロシア語学科卒。1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』を発表し注目される。1984年『夢遊王国のための音楽』で野間文芸新人賞、1992年『彼岸先生』で泉鏡花文学賞、2006年『退廃姉妹』で伊藤整文学賞、2008年『カオスの娘』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。2010年下半期より芥川賞選考委員となる。

主な著書に『天国が降ってくる』『僕は模造人間』『忘れられた帝国』『彗星の住人』『美しい魂』『エトロフの恋』『フランシスコ・X』『佳人の奇遇』『徒然王子』『傾国子女』『虚人の星』など多数。

参加者…8名
進行…芹澤

【会の記録】

感想や意見

- ・ コミュニーンの問題にオウム真理教を想像した。
- ・ 朝さろんで過去に取り上げた『ヘヴン』（川上未映子）の「お金がないなら刷ったらいじゃん」を思い出した。前半はお金が人と関わるという問題を俯瞰で見ていたような印象、ところが後半では「野々宮の痛み」というようなテーマに大きく変わった気がした。
- ・ 「お金」自体が語り手となって前景化しているような印象を持った。郭解の目的がよくわからなかった。彼自身の本当の欲望（目的）が何なのか、あるいはお金が欲望の主体に取って代わっているような。不気味さを覚えた。
- ・ 譲渡経済に興味がある。シェアハウスに住んでいたことがあり、そこではハウス内の通貨があった。コミュニーンがその後どうなるのか。組織の継続性はどうやって維持していくのか。
- ・ 経済描写や政治の陰謀の部分など、書き急いでいるというか、雑な印象。もっと丁寧な、細かく書き込んでほしい。
- ・ 偽札を150億円分刷ったら本当にこんなことが起こるのか。現実感が持てない。
- ・ エリカのような優等生タイプはダメ人間に堕ちていくのか。野々宮のどこにそんな魅力があるのか。
- ・ 台本の書き割り、プロットのような小説。いわゆる小説的な描写や人物造型がいまいち物足りない。
- ・ 貨幣経済の破壊は言ってみれば「神殺し」のようなもの。「神殺し」を目指した野々宮が実際にしようとしたのは「父殺し」のレベルだった。しかもそれも成功はしていない、とも読める。「父殺し」の要件とはなにか。
- ・ 「神殺し」をした後には常に新しい神がその座に着くだろう。池尻には新しい神が構想されていたが、野々宮にはそれがなかった。また郭解はどうだろうか。
- ・ 貨幣経済ではない未来、特に説得力のある未来とはいったいどんなものだろう。貨幣経済（資本主義経済）を捨てることなどできるだろうか。